

マレーシア：サバ校 (サイエンススクール・コタキナバル)

永吉大洋 (北海道旭川市)

期間：2012年8月24日～9月23日 (31日間)

8月27日(月) 初登校日

今の気持ちをどう表現したらよいのでしょうか!! 今日、初めてサイエンス校に行きました。

つまり日本語教師のアシスタントとして、最初の登校日です。楽しかった!! 満足した!! 感動した!! 嬉しかった!! 不安もいっぱいありましたけれど、本当に挑戦してよかった!! こんなに素直な子供たちが、こんなに私を心から歓迎してくれるなんて!! これが現在の率直な感想です。来年も来ます!! 日本にいては、決して味わうことのできない充足感です!!

唐突ですが、思い出しました!

昔、斎藤茂吉は、「小学のおさなごどもは あさなあさな このひとつ峠 走りつつ 越ゆ」と歌いました。昭和7年のことです。あの時代の日本の子供たちと同じように、学ぶ喜びや楽しさが、サイエンス校の子供たちの生き生きした表情に、はっきりと表れています。

実は、これはサイエンス校に初登校した日の、私の日記の一部です。今、読み返しても、その時の深い感動が、まざまざとよみがえってまいります。

サイエンス校について

コタキナバルにある全寮制のエリート校で、日本の中学1年から高校2年までに相当する5年制学校です。全校生徒は600人、教職員は約60人です。日本語は選択科目で、他にフランス語、アラビア語がありますが、日本語が一番人気が高いそうです。私が教えた学年は、1年から3年まででしたが、1学年100人のうち、約6割の生徒が日本語を履修していました。

ボランティアの私たちには、日本語のほかに日本文化に関する造詣や知識が求められます。例えば書道、茶道、華道、柔道、空手、アニメなどに、子供たちは強い興味を持っていました。ある時男子生徒から、「先生、ハチコについて教えてください」と質問を受けました。「ハチコ?」それが「忠犬ハチ公」のことだとわかるまで、しばしの時間が必要でした。担任のミナ先生は、「子供たちは日本が大好きです。ですからボランティアの先生も大好きです」と話されていました。

日本の文化に触れる週間

私がコタキナバルに滞在をしたのは約1カ月でしたが、9月初めの1週間だけ、妻に応援を求めて、授業に参加してもらいました。つまり日本語教師のアシスタントのアシスタントです。



着物を着て、みんなにっこり!

ミナ先生はその1週間を「日本の文化に触れる週間」と名付けて、日本の文化や慣習を子供たちに紹介する時間に充ててくださいました。妻は暑い中でしたが、毎日着物を着て登校し、子供たちに着物の着付けをしました。着物を着た女の子の嬉しそうな表情が、懐かしく思い出されます。

また日本の唱歌の紹介では、講堂のピアノで、「さくら」や「赤い靴」「かごめ」を一緒に歌いました。特にわらべ歌の「かごめ」は、最後にみんなで円を作り、「後ろの正面だ〜れ」の遊びをしました。これが女の子だけでなく、男子生徒にも大人気で、“once more”と何度も繰り返し遊んだことがとても印象的でした。

私は日本から持参のビニールプールに水を張り、日本の縁日で子供たちが遊ぶ「金魚すくい」を体験してもらいました。男の子たちは初めての挑戦なのにとっても上手で、薄い紙を破らずにおもちゃの金魚を何匹もすくい上げたのには、驚かされました。

ブルネイ観光

せっかくの機会でしたので、妻の授業応援が終わった週末に、隣国ブルネイに1泊2日の小旅行をしました。飛行機でわずか35分です。宿泊ホテルは世界に2つしかない超豪華な7つ星ホテルでしたが、何せブルネイは厳格なイスラム国家ですので、国中どこにもアルコールがありません。そこで入国時にワイン1本と缶ビール4缶を申告して持ち込みました。でもレストランでは飲むことができず、結局ルームサービスの食事を取り、部屋で飲みました。

そうそう、その7つ星ホテルのロビーで、今を時め

くヒラリー・クリントン国務長官と、わずか 5、6 メートルの至近距離でニアミスしたことも、生涯忘れられない思い出です。

コタキナバルで出会った人々

直接お目にかかっていますが、今回のボランティア参加には、WSC の青島さんに多大なご尽力をいただきました。また滞在したマリナーコートのオーナーの氏原さんご夫妻には、何から何までお世話になりました。そしてルームメートの荒井さんと高橋さん。こ

の歳でルームシェアするなんて、どうなることやら……と心配していましたが、素晴らしい仲間恵まれ、快適な生活を過ごすことができました。高橋さんには、テニスサークルの引き継ぎまでしていただき、コタキナバル在住の日本人の皆さんとテニスを通じて交流を深めることができました。

最後になりましたが、素直な子供たちとミナ先生、そして多くの心温かな人たちと出会い、その交流を通じて、素晴らしいコタキナバルの生活を満喫できたことを、改めて感謝申し上げます。